白金薮

４月号

平成 30 年４月発行　　第８６号

定例句会（毎月第三金曜日　アビスタ会議室）

五月十八日（金）正午～三時第四兼題：母の日、松落葉
六月十五日（金）〃　〃　兼題：夏の蝶、簗やな
七月二十日（金）蓮見船（九時半小池ボート）正午～三時第三

兼題句参考句5月18日分（母の日、松落葉）

母の日の破船に青藻房なせり　小檜山繁子
母の日や母情疑うことのなし　藤映子
清滝や波に散りこむ青松葉　芭蕉
夜しばし雨そふ松の落ち葉かな　素亭
かんぬきをさせば月夜や松落葉　渡辺水巴
生きながら焼かるる蟹や松落葉　長谷川櫂

月例句会報（'18／4／26　9名欠3　柳絮飛ぶ、しゃぼん玉）

利根川に白波立って柳絮飛ぶ　光成高志
柳絮舞ふ森林セラピー基地に立ち
水鉄砲しゃぼん玉打つ小豆大
念仏や次々生るゝしゃぼん玉
スイングを振れば多産のしゃぼんだま

朝貢の琉球使節柳絮とぶ　仲本興正
母と子の追いかけ遊び柳絮とぶ
風あれば風のゆくみち石鹸玉
石鹸玉ひとつ生れてはひとつ消ゆ
崖下の八重桜の枝匂いたつ

ジッパーを下す如くに落雲雀　増田陽一
恐竜も幼きは樹のトカゲかな
柳絮とぶ瘤白鳥は頸を立て
海戦忌麦藁で吹く石鹸玉
雉啼きて沼伸び縮む薄曇

手賀沼の柳絮とぶ日に行き合はせ　松村幸一
しゃぼん玉双子ながらにいつまでも
惜命といふこと知らず石鹸玉
青葉若葉にさしぐむことも病後かな
緞帳の藤の小迷路大迷路

咲き急ぐ庭に藤の花の屑
柳絮飛ぶ旅路の思い出アルバムに
藤棚に立ち上がる花下がる花
母と子を包んで割れるシャボン玉（旭川科学館）
しゃぼん玉空へ砂場へブランコへ

浅野正美

隣とは庭続きなり石鹸玉
魚跳ねるたびに振り向く花筵
石鹸玉犬に見えざるもののあり
つばくらめ布団叩けば翻る
柳絮飛ぶゆき着くところ池の中

光　みち

花冷や午後の紅茶の甘くして
経を読む鳥影さして春障子
春嵐犬小屋に犬ひっそりと
しゃぼん玉吹くもひとりの一人っ子

吉羽多美子

柳絮飛ぶ今に残りて武家屋敷
靖国の社頭に石鹸玉飛ばす
真如とは是黒竹の筍は
かなしみの極みに石鹸玉飛ばす
春愁食指に痕る灸跡
田植機と雖蛇行は許されず

佐藤宏之助

柳絮飛ぶ沖の沼面や鯉跳ねる
しゃぼん玉妹焦らせ嬉々と吹く
柳絮（わた）風に芦原越えて沼縹渺
しゃぼん玉虹色割れて夢と消ゆ
沼尽きて川一筋に春光る（手賀小景）

磯目健二

こぶし散り空の青さがむき出しに
海青し新緑の間より覗く時
夜桜や酔いどれの頭上の銀河

武者昭七

塀越しに天蓋のごとこぶし咲き
引いてゆく浪のあと追ふ桜貝

飯田孝三

連翹や俳聖芭蕉馬に揺れ
花総立ち赤白黄いろチューリップ
石鹸玉昭和は母の匂して
スカイツリーの川縁柳絮とぶ
放哉の障子小さし春の山

田宮敦子

木々芽吹くサイクリングの一列に
春の雨知らぬふりして歩きけり
血豆消え散り始めたる八重桜
バーベキュー曙橋の芽吹く下
クローバー思はず四葉探しけり
一句鑑賞　光成高志

しゃぼん玉空へ砂場へブランコへ　正美

しゃぼん玉の飛ぶ先々の物を次々と書いてあり、読者はそれを眼で追うので臨場感があります。壊れて消えたことは無論省略して、その美しさ儚さが心に残ります。それが余韻です。

沼尽きて川一筋に春光る（手賀小景）　**健二**

前書きを読むと、これは手賀川の春の風景です。手賀沼は元々今の倍以上の広さがあって利根川とつながっていました。我孫子市の布佐や新木や湖北、木下も手賀沼であったのですが、戦後干拓が完成して今は田圃になっています。今の沼の端は沼尻と言って、そこに水門を設けて沼の水位を調整して利根川に流していますが、その一筋の川が手賀川です。手賀川の川尻が木下であって先年遊船の吟行を行った町です。貞享４年の芭蕉の鹿島詣に出て来る布佐の隣の河岸です。書いていると切りがないので、句に戻ります。健二さんは手賀川の木下側でよく鮒を釣ったとおっしゃっておられたので、その思い出を句にされたのでしょう。私なら少し直して「沼尻より一筋の川風光る」とします。「沼尻ゆ」と古語を使ってもいいでしょう。

海青し新緑の間より覗く時　昭七

これは鎌倉の山より見た相模湾の風景と思います。新緑の源氏山とか鎌倉文学館の辺りでもそうですが、新緑の間から覗ける海の青さが周りの新緑のにほひと共に甦ってきます。海青しという出出しに作者のああという心

の動きが伝わってきます。これでもいいのですが、もう少し言葉を揺さぶって「海青し新樹の間を覗く時」とかあるいは、間はあいとも読めるので、よりを取ってもいいでしょう。

真如とは是黒竹の筍は　　宏之助

この句、漢文で書けば、真如黒竹是筍、の主語述語の構文です。訓読のルビを打てば、真如ハ黒竹ノ是レ筍ナリ。真如は黒竹の是筍なり。是は筍を強調しているのですぐ前に付けます。禅の考案に対して答えた文章です。掲句のように「・・是黒竹の筍は」と書いた場合又問にもとれます。真如とは是是黒竹の筍は?となってこれはこれで元に返り、真如とはと繰り返され、下に行って又返る、無限の問を発している面白い考案になります。問答を繰り返す修行が永平寺で行われていますが、黒竹の発している精気に触発されて句となったのでしょう。

一句鑑賞　　武者昭七

風あれば風のゆくみち石鹸玉　　興生

人それぞれに通いなれた道があるように、風にもそれぞれの風の行く道があるらしい。風に乗り列をなして流れていくシャボンダマに作者は辿ってきたおのれの人生をかさねている。

石鹸玉昭和は母の匂ひして　　孝三

僕らの世代は昭和という時代にすっぽり浸って育ち生きてきた。「母」は今よりはずっと身近な存在だった。それはシャボンダマのようになつかしい存在だった。「母」はシャボンダマといつも一緒だった。洗濯機なんかない時代だった。「母」はいつもシャボンのにおいをさせていた。匂だけを残して「母」も昭和も遠くなってしまった。

青葉若葉にさしぐむことも病後かな　　幸一

涙するまでにはいたらずとも自然はこんなにも美しかったのかとあらためて目を見張ることがある。病後ともあればなおさらのこと。生きてあることの感動に涙するのである。こころ弱りの涙ととってはなるまい。新しい自然の発見は新しい生への旅立ちだ。

惜命といふ事知らず石鹸玉　　〃

いのちを惜しまず務め励むことを「不惜身命」という。反対に、風に身を任せて風吹くままに飛び散っていくシャボンダマの、おのがいのちにこだわらぬありようを「惜命を知らず」といったのであろう。静かな悟りに似た境地がにじむ。

しゃぼんだま妹焦らし嬉々と吹く　　健二

しゃぼんだま吹きの順番待ちである。わざと妹を焦らすのが楽しいのだ。それが「嬉々と吹く」に見事にとら

えられている。仲のいい姉妹だ。こういう句はひとを明るくする。

一句鑑賞　　増田陽一

真如とは是黒竹の筍は　　宏之助

クロチクはハチクの亜種だそうで、僕はその筍を見た事は無いけれど、掲句のイメージとしては黒々と直立し、真如とは是、と禅僧の喝破するような鋭い存在感のあるものであって欲しい。簡潔で力強く、句の勢が好く「黒竹」の語の発見によって禅問答（?）が生きる。

青葉若葉にさしぐむことも病後かな　　幸一

生命感に溢れるはずの季節であるのに涙にくれている青葉闇が記憶を誘い、過剰な感性にとってはむしろ憂いを誘うのである。病後のせいでもあろうけれど、作者自身、病後のせいだと自らに言い聞かせている趣きがある。生命感の横溢は同時に憂いでもあるのだ。

引いてゆく浪のあと追ふ桜貝　　昭七

桜貝は本州以南潮線下に広く棲息し近似種も多い。生きた貝を見ることは稀だが、浜に打ち上げられた殻を拾うと嬉しいものである。掲句は桜色の殻がさざ波にたゆたうさまかと思われる。貝が海に帰りたがっているかのように、はかない美しさを言いとめている。

石鹸玉犬に見えざるもののあり　　みち

人間の興じる可愛らしい石鹸玉に犬は無関心で居るようだ。けれど犬は視覚の動物ではなく嗅覚の鋭さが人の百倍、獣の予知本能も残存する。掲句の「見えざるもののあり」という語調は反面、人には見えぬもの、石鹸玉より重大な天災の気配などをも犬は感じる、と解したくなるところに句の奥行きがありそうで仕方がない。

一句鑑賞　　磯目健二

柳絮飛びゆき着くところ池の中　　みち

柳絮とは柳の種子にほかならない。新天地での繁殖を求めて飛ぶのだが、悲しいかなほとんどが池の水中に没して無駄死にする運命だ。なにやら多くの青年が客気に駆られて壮途に就くも、多く挫折するのに似て哀しい。

恐竜も幼きは樹のトカゲかな　　陽一

コモドオオトカゲは、まさに太古の恐竜そっくりの獰猛で巨大な肉食動物だが、幼少期は樹上生活を送る青色の小さなトカゲである。とすれば、恐竜も幼い頃は同じような可愛い存在だったにちがいない。作者独特の奇抜な連想と類推の面白さが妙味となっている。

青葉若葉にさしぐむことも病後かな　　幸一

永い病床から解放されて外へ出ると、季節は移ろって

新緑鮮やかな景色が目の前にある。久しぶりに自然の豊かな生命力に触れて、回生の安堵とともに病み上がりの人特有の過敏な感受性で思わず涙ぐまずには居られない。生きることのしみじみとした実感と感謝の気持ちの滲む佳句。

石鹸玉昭和は母の匂して　　孝三

　昔のシャボン玉は手で洗濯する母親の石鹸を水に溶いて麦わらで吹いて遊ぶものだった。苛性の強い洗濯石鹸でなく柔和で香りのいい化粧石鹸のシャボン玉が好まれた。その香りは、母親の匂いでもあった。一文商いの駄菓子屋や線香花火、マッチ、メンコなど健在だった昭和の時代、その頃は母もまだ若々しかった。

春嵐犬小屋に犬ひっそりと　　多美子

　大荒れの春疾風が吹きまくるなか、庭の片隅では哀れにも老犬が尻尾を巻いて狭い犬小屋の奥へ身を潜め閉塞している。極めて音響に臆病な犬にとって春の嵐の凄まじい荒れようは、恐怖そのものである。犬のためにも一刻も早い終息を祈りたい。

しゃぼん玉吹くもひとりの一人っ子　　〃

　ふつうシャボン玉は友達や兄弟でする賑やかな遊びだが、現代の共稼ぎ家庭の一人っ子はいわゆる鍵っ子で、留守番しながらひとり楽しむシャボン玉は傍目には孤独で寂しい。しかし、案外と本人は夢中かも知れない。ひとり遊びを発明するのが子どもだから。

隣とは庭続きなり石鹸玉　　みち

　こちらの庭でケンちゃんの吹いたシャボン玉が春風に乗って低い垣根を越えて隣の庭へ流れてゆく。と、シャボン玉をハナちゃんが笑顔で待ち構えていた。風向きが変わると向こうから流れてくるときもあるだろう。境界線はあっても無いような住民同士の和やかな日常風景が、いつも見られる住宅地なのである。

朝貢の琉球使節柳絮とぶ　　興正

　薩摩藩の制圧下にあった琉球王国は明・清にも朝貢し冊封を受けていた。進貢船は秋に沖縄を出発して東シナ海を渡り福建省から首都北京を目指した。翌春に朝貢使節は北京から福州へ戻って帰国した。朝貢の実質は、臣従の代償に厖大な財貨が与えられる超有利な貿易にほかならなかった。今や使節は多大の報賞品を荷駄に柳絮の飛ぶ復路を辿るのである。広大な東アジアの歴史的風景を切り取るロマン溢れる句である。

新宿御苑吟行句会（4／15　四谷地域センター）

ヒマラヤ杉の間を流るゝ春の雲　　光成高志

四十雀間無く鳴きをり大木戸門
深紅の石楠花咲けり大木戸門
緑立つ池の島ありビル聳え
一陣の風来て散れる八重桜
老木の染井吉野の葉は盛ん
ハンカチノキハンカチ広く散り敷ける

佐藤宏之助

桂木の若葉に心洗ひたり
巣造りに励む御苑の鴉かな
めまとひよ我が眼欲しくば呉れてやる
銀杏巨樹ぐるりに雄蕊しきつめて
るるるると鳥の求愛はじまれり
初燕大木戸門を潜りけり
一畝ほどこゝが御苑の蕗畑

（洗足池、皇居他）

光　みち

よく走る稚児追ひかける石鹸玉
局門閉ざし衛士立つ江戸彼岸
春塵や弁天島の土埃
春嵐神鈴の紐括りあり
春荒れの突風くれば仁王立ち
這ひ這ひの稚ゃゃもスカート花筵
伸び切って土筆総立ちして暮るゝ

俳窓評論纂

＊句会当日の天声人語にしゃぼん玉の事が書かれた。石鹸を製造したのは蘭学者の宇田川榕菴（ようあん）である。生誕220年を迎えた。今でいう化学者であると紹介した大阪市立大の小野昌弘学芸員（51）が今格闘しているのがしゃぼん玉であるとか。無論しゃぼん玉は石鹸水から生まれるあの玉である。表面張力や七色の光りの仕組みなどを解説するのは科学であるが、我らはそこに詩を見出す。〈しゃぼん玉底にも小さき太陽持つ〉（篠原梵）。しゃぼん玉に旬などないがこの季節によく似合う、で締めている。今日の兼題だ。どんな句が出るのだろうか。今から家を出るので一寸書いてみた。

＊選句の力（秋尾　敏）昔の切り抜きが出てきたので紹介する。「三千の俳句を閲し柿二つ」（正岡子規）これは選句に飽き飽きしている子規の心だとか？汀女句集の序には虚子が「選は創作なり」と書いている。虚子は選句

と言う行為を通して中村汀女という俳人を作り上げたと言っているのだ。選句には、異なるふたつの価値観が同居している。ひとつはその句が俳句と呼ぶにふさわしい姿をしているかということであり、もうひとつはその表現が独自の輝きを持っているかということである。一方で一般性を問いながら、他方で特殊性を問うというプロセスの中に、個人の言葉と社会の言葉との間合いを計り合う選句の本質がある。近代の言葉は、個人の内面を形成するというテーマを持っていたが、その内面というものは、外部との関係性によって形成されていくものなのである。「行春や選者を恨む哥の主」（蕪村）で結んでいる。（第一の価値は初心者の句を選ぶ時に考えるが、我々には無視していいでしょう。第二の価値はその人の個性が出ているかということ、これが大切です。表現よりどのような季語でもって何を詠うかという対象に個性が出てくると思います。以前に書いたが、己の癖などと闘って普遍的なものを掴む努力に個性が現れるのであって、それには無心にならなければ出る訳がない。自己主張しようとする句に個性は現れないということです。私は造化にしたがい造化に帰れとなりと思って作句しております。それを基準に選句しております。）

＊以前付き合いのあった辻桃子選の句が読売俳壇千葉版に載っていたので紹介する。4月24日（火）の新聞である。特選二句は「啓蟄や平飼ひ鶏の足太く」と「自動車に逃げ込む畑の春時雨」の二句。両句とも私は佳句と思うし、今も句のような体験していることなので、親しみも湧いた。桃子さんご健在のようです。

＊上里達博（朝日の客員論説委員）の情報化がもたらす変化　時代を根本から見つめ直せ　が掲載された。若い千葉大の教授で、やや隔靴掻痒だが、現代をいい当てていると思ったので又上の選句にもかかわると思えたので紹介します。ここ25年の間の情報化の進展は私たちの生活を根本から変えた。それはＩＴ（情報化）であると。日本がめっきり経済成長しなくなったのもおおむね同じ頃からだ。ＩＴ分野で日本は出遅れたのだ。なぜ日本にはＡｐｐｌｅやＧｏｏｇｌｅが生れなかったのか。これは日本のリーダーたちの理解不足が原因のひとつだ。20世紀後半から起きた「情報化」という流れが、どれほど大きな変革をもたらすか。そのスケール感を把握できていなかったからだ。情報化というのは、単に技術的な問題であると考えている組織人は多い。今世界で起こっていることは相当に根本的なまさに世界史的な変化である。そのことを正しく理解するためには自分たちの時代を外部の視点から見つめなおす他は無い。本当の外部には立てないので、そのためには歴史に学ぶ方法が役立つ。今

の近代は何が大きく変わったのだろうか。まず挙げるべきは客観性の重視であろう。中世は、人々の内面が重視された時代である。美術然り。妖怪や精霊の類がよく描かれたのも人々の心の中に確かに存在していたからだ。だが、近代的な客観主義は科学と結びつき、そのような現実でないものは表舞台から退場させた。もうひとつは物質の重視である。中世は、精神性が大切にされた一方で「モノ」の価値はあまり強調されなかった。生産性が低かったからだ。近代に入ると大量生産・大量消費の時代がやってくる。モノをたくさん作り使うことが正しいことになったのだ。では情報化が進む今も、客観主義や物質主義は、この社会において支配的な価値観といえるだろうか。そうではない。すでにネットの世界では、実在するかどうか、真実がどうかよりも、多くの人々に承認されることに高い価値がおかれるようになっている。「クール」なのは再生回数が多いビデオであり、多数の「いいね」がつく写真だ。また臨場感の高いバーチャルなゲームも人気がある。そこでは現実と仮想がシームレスに接続し、ゲーム内の通貨も含め、アイテムのやりとりが重要な意味を持つ。モノに関心を示さなくなった若者が増えている。近代の典型的な価値観を逸脱している側面があるらしい。その意味で私たちは「近代の次」に足を踏み入れているのかも知れない云々。(私も本誌の編集をいかに速く楽に発行して読者に届けるかを考え考えて、電子メールを利用する編集に変えた。昔々、ガリ版印刷で冊子を作った思い出もあるし、図面の青焼きも大変だった。私の現役時代は25年前の回想録に書いたが、コンピュータに振り回される仕事だった。計算機がどんどん変わるのでそれについて行くのが大変忙しかった。冷蔵庫大の大きな電算機があれよあれよという間に今の卓上パソコンになってその能力も大型計算機並になって値段も安くなった。それまでに費やした労力お金は何だったのかと思ったものである。平成8年という年(一九九六)に勤務先も各人にウインドウズ版搭載のパソコンが配布されワード&エクセルとメールで仕事をするようになった。事務所の自動化を言うOA化という言葉もその頃のことである。書いていると脱線して走りそうになるので、止めますが、尺貫法からメートル法へCGS単位からSI単位へなども一連の流れにある。わが国は自立してからも外国の文化が押し寄せてそれに応接しなければならぬ宿命があるのだ。漢字からかな文字を発明したのは良かったことだが、今はカタカナ語が氾濫するようになっているし、外国が押し寄せるのを止めることはできないのも宿命だ。鎖国したのも仕方がないことだった。竜馬が日本は守れない国だよといったのもその通りだし、まして上の情報化の波を止めることはできないのと同じ。先の津波禍と同じだ。私が近代の次を見ることは寿命が許さない。おそらく、チブクロサンボの虎のようにぐ

るぐる回っている内に溶けてバターになったような人間がうようよ跋扈している日本になっているのだろう。）

受贈誌（平成30年四月号）

天上に潤（ほとぶ）極星雪解どき（彩140号）　平野ひろし
谷底は黄河の濁り雪解谷　（〃）　〃
銀尽きし間歩を蔵して山笑ふ　（〃）　〃
舌下錠舌下に寒の夜が更ける　（〃）　河端不三子
がじゆまるの気根千万敗戦忌　（〃）　貫名弘子
枯蓮の水の下にも蓮涸るる（〃）　飯塚みどり

こだま

将門の井戸に社に初詣　（彩140号）　光成高志
まち針が豆腐に咲いて針供養　（〃）　〃

芭蕉のかるみ以後（44）　光成高志

延宝八年に荘子を学んで眼を開かれたと以前書いた。綾女さん在住の池田市に墓がある田中桐江から荘子を学んだのだ。その新年は「於春々大いなる哉春と云々」という自祝の句を作って、四月には「桃青門弟獨吟二十歌仙」を上梓し意気上がっていた。六月には神田上水工事が終了しその任から解放された。七月には綱吉の将軍宣下。八月には基角の「田舎の句合」の巻末に荘子風の栩々齋主云々の署名をした。九月には杉風の「常盤屋の句合」が成り、その跋文に冬瓜で締める面白い文章を与えた。言水の江戸弁慶が成ったのもこの年で、新井白石の発句も掲載された。言水の東日記によって、後名月のまえがきの句「夜ル竊ニ虫は月下の栗を穿ツ」「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」はその頃の発句である。延宝八年の暮れに杉風が店のやしきに移り、泊船堂と称して子供の手習い師匠となる。これが寛文十二年下江以来、九年目の深川隠棲である。深川冬夜の感「櫓の声波ヲ打つて腸（はらわた）氷ル夜や涙」は千春の編んだ武蔵曲に載っているその時の桃青の感慨である。又以前執筆をつとめた高野幽山の『誹枕』が刊行されたのもこの年である。その序文は芭蕉の俳友の山口素堂が書いている。それを読むと西は鹿児島の坊津まで東は津軽まで足を重しとせず、寺という寺、社というやしろ、見て回り飛騨の匠の心をも見たというし、實方の塚の芒を曲げ、十符の菅菰を尋ね、緒絶橋の木の切を袋に納め、いろの濱の小貝迄、都のつとにもたれたり、されば一見の所々にて受け記したる言葉の種、たいしたものではないものも取り重ねて、寛文の頃櫻木にあらはすべきを、障り多きあしまの蟹のよこ道にまつはれ、延る寶の八つの年漸こと成ぬ云々と書いていて、

国別の発句抄、みちのくの名所の発句及び脇句を抄記している。例えば、高瀧益翁獨吟

三吉野や天からふつた花の雪　　翁

富士の霞になく鴟の糞

この翁は芭蕉のことではない。三吉野は天から花吹雪が降るが富士の霞に鳶の糞が降るという吉野と富士の名所の俳諧である。このような句集を桃青も読んでいた筈であり、世話になった俳諧師に技癢を感じたに違いない。奥の細道とは藤原實方が通った塩釜辺りにあるらしいから、そこから後の「おくのほそ道」と名づけたのでないだろうか。延宝九年は天和元年である。「年立つや新年ふるし米五升」が赤艸子に見える。この春伊藤信徳らは「俳諧七百五十韻」を催し、春澄巻頭語を寄す。曰、至調不レ飾、至寶不レ華、達士賢而少。我友はおほくして、しかもあほうどもとなりといふもさのごとし。一、江戸櫻志賀の都はあれにけり　信徳　二、浦島が上鬚化して白魚成べし　正長　三、竹の精翁姿や皮の面　如風　四、海鬼燈ホウズキ乙姫舌をふりたてたり　政定　五、雁にきけいなおほせ鳥といへるあり　春澄、以下略。最後のいなおほせ鳥とは、鳥の名で、否仰せ鳥、否と仰せの女、いやいやと泣くひとのことを指している。雁に聞けとは、初雁を詠んだ歌「わがかどにいなおほせ鳥のなくなへにけさ吹く風にかりはきにけり」がありそれを踏まえている。雁は鳥で女を寓意して、雁は借りで、狩りを寓意して、あさり、となり、めとり、となり、まぐあいを最後に想像させる要するに恋の句なのである。それだけの本歌本説を含む俳諧であって、言葉遊びというか、言語遊戯俳諧の横溢した百韻であった。

お便り広場（到着順、敬称略）

桜の便りが待ちどうしい季節となりましたが、お元気ですか?私方変わりなく過ごしています。この度、白金葭二月号を送っていただき有難うございました。一句鑑賞でこんなにも深く洞察、評価に驚かされました。最近、富士山・伊豆・箱根・富士見テラスの二泊三日の旅行に二人で行ってきました。あいにくの雨、曇空で富士山の雄大な眺めは見ることができませんでしたが、二日目の三月九日に伊豆の国パロラマパーク富士見テラスで少しだけ富士山をみることができました。朝夕寒い日が続きます。ご自愛ください。　（3.20昇）

うららかな春のひざしに照らされて野も山も春を感じる季節です。白金葭2月号三月号受けとりながら失礼しておりました。拓也君東京マラソンに参加したのか元気で交流できること喜ばしい。こちらも何も変化もないが

歳と共に色々と故障がでてくること歳を考えて上手くつきあって行くことゝ思っております。先日久しぶりに妹峯子が来て夕食炊いたばかりで二人で食べて少し話して帰りました。風邪が長く治らず困ったと言っていた。私は田んぼにレンゲ植えるので今は真青になっています。

（3.26 健三）

お父様お母様結婚50周年の金婚式おめでとうございます。これまで色々支えていただきありがとうございます。末長くお元気に幸多き日をお過ごし下さい。（4.1 晶子）

いつもお心におかけ下さってありがとうございます。お便りと春の香り一杯のつくしんぼう、ありがとうございます。又々、サプライズ、春の夜半につくしのおはかまを取っている老婆の図っていかゞでしょうか。新しい中にと軽く茹で京都のだし醤油で佃煮風に煮ました。ほのかな苦さとこれぞ土筆の味を白くあたゝかいご飯で頂きました。（何日も食卓に上りました）五、六本はガラスの小さな入れものに挿しやはり青い粉が落ち、不思議な植物を実感、外国にあるものなのかと想像がアチコチしております。厚く御礼申し上げます。新宿御苑吟行の件ですがおさそい光栄に存じみち様ともお話したいのは山々ですが集合時間と五時までの時間帯とあの広さを歩けてもご迷惑はまちがいなしと云い聞かせ、ご遠慮させて頂くこととといたしました。白金葭誌上で皆々様のご健吟を拝読させて頂きます。ごきげんよう。

（4.1 璃子）

みち様

光成さま　久しぶりにお手紙をしますが、お元気にお過ごしのことと思います。私達夫婦は76才と72才となりましたが、なんとか元気に過ごしております。小山さんが病でリハビリ中と東京の根本さんからのメールで知りました。今、リハビリ中と聞きましたが何とか元気になって欲しいと思います。ところで、私の娘の夫である金子琢磨君がひさしぶりに油絵画展を開きます。4月11日（水）～17日（火）に新宿の小田急百貨店での開催です。彼は昨年三月安曇野市に転居し、先に転居していたご両親の敷地の一角に木造二階建てを新築して新生活を始めております。私と女房は昨年九月に安曇野を訪れ新居や周囲の環境を確認し、安曇野の観光もしました。敷地は広く静かな環境であり、空気は美味しいし、栗や胡桃の木々もあり、家庭菜園をご両親がされており、都会では考えられない良い環境でした。近くには北アルプスもあり彼の画材には事欠かないのではと思います。（中略）尚、案内状を二枚同封します。光成さんはお忙しい身なので都内に出かけることは余りないと思います。俳句の会には会員がたくさんおられますので、俳句以外に

画が趣味の方もおられるのでは？と思います。会員の方で画の好きな人がおられましたら渡して下されば有難いです。以上よろしくお願い致します。　（43 土屋健）

（頂いた二枚は他の人に差し上げましたが、4／15（日）に御苑吟行後新宿に寄り、3人で金子さんの絵を鑑賞致しました。彼には丁寧な応対をしてもらいました。展示品数も増え質を高めたと思われましたので私なりに励ましの広島弁を発しておきました。一〇号？で百万円を超える値札が付いていたのは実力を挙げた証と思われた。私には本誌の陽一さんの他、三原、門田両君の日展があったり、色んな事に好奇心の向くまま月一ぐらいは東京に出ます。私から手紙をしなければならないのにこの度の案内ありがとうございました。頂いた手紙を載せた本誌四月号をお送りしましてお礼に代えます。高志）

御案内いただいております明4/15の新宿御苑での吟行は悪天候が予想されますので、外出を控えたく思いますので、残念ですが不参加といたします。　（4.14 孝三）

随分とお会いしていない気がします。「男子三日会わざれば刮目して待つべし」と申しますが、主宰も得るところあって文藻を豊かにしたことと思います。来週からは源氏物語も始まりますので、その折に聞くのが楽しみです。また、26日の例会で皆様にお会いできるのを楽しみにしています。明日の吟行は思案を重ねた結果、脚力に自信が無く蹌踉随伴では申し訳ないので欠席させて頂きたいと思います。どうか悪しからずご了承ください。新宿御苑は、思い出の地であり、久しぶりに再訪したかったのですが、今回は見送ることにします。　（4.14 健二）

お父さん、誕生日おめでとう76歳ですか。マイペースにゆっくり過ごして下さい。病気遍歴の手紙よく分かりました。自分も同じ傾向はあると思うので気を付けたいと思いました。　（4.14 拓也）

お父様遅れましたが76才お誕生日おめでとうございます。お身体ご自愛下さい。ますますのご活躍をお祈りいたします。PS：省略　（4.16 晶子）

光成様お誕生日おめでとうございます。光成様のご健康心からお祈りいたします。　（4.16 菅真理子）

来週の句会も休ませて下さい。腕の骨を折ってじっとしていた所為かあちこちおかしくなって調子があがりません。夏頃までには出られるようにあせらずリハビリを続けますので欠席投句をさせてね。　（4.17 幸一）

光成さま　金子琢磨の個展の会場へ来てくださったとのこと、お忙しいのに有難うございました。その上（中略）松崎さんは自宅の階段で足を踏み外し足を骨折し松葉杖を使う生活となり全治二～三カ月だそうです。私も光成さんも高齢者なので階段の上り下りは危険です。気

を付けるようにしましょう。今回は有難うございました。

（4.23 健）

我孫子日記

3/16	例会
3/20	野田源氏
3/21	陽一宅
3/26 ＊	皇居花見
3/28 ＊2	今井土手の花見
4/1 ＊3	祝膳
4/3～5 ＊4	北総病院
4/15 ＊5	新宿御苑・画展
4/17 ＊6	野田源氏
4/18	SOA
4/21	免許更新講習
4/22 ＊7	桐生
4/25	SOA
4/26	例会

＊警察大花見の列を来て戻る　高志

石垣の旧江戸城の桜かな　〃

道灌濠に傾るゝ幹の大櫻　みち

誓子忌の桜咲き満つ乾門　高志

老松のありて薄墨桜かな　みち

桜四本立つ道あって人止る　高志

花を見る列が皇居を通り抜け　〃

山吹や日陰続きの門長屋　みち

乾門まで松と桜の通り抜け　〃

群れ咲ける皇居の土手のいぬふぐり　高志

懐かしき千鳥ヶ淵の桜かな　〃

*2 傍らの蓬摘みたり花筵　〃

一合の花見弁当五目豆　みち

花筵ヨガの足組み背筋立て　〃

木の下におどけて自撮桜かな　高志

*3 我が墓に参りに来たる四月馬鹿　みち

金婚のランチに集ふ万愚節　高志

*4 病窓の早新緑の明るさに　〃

鶯が鳴く病院の林にて　〃

棚面の平らを白く梨の花　〃

*5 春荒や竹林うねり空は鳴る　〃

大木の林を抜けて春日照る　〃

花屑の上を転がる落花かな　〃

松落葉春の鵜のあまたゐて　〃

大広場ありてすれすれつばくらめ　〃

*6 藤房のはつかに揺るゝ裏通り　〃

漬物店欅若葉をこんもりと　〃

源氏物語ゲンジ読みに行く途次に買ふ柏餅　〃

*7 上州の麦青みたり薄霞　〃

両毛号山藤見ゆる山みどり　〃

渡良瀬川わたらせの早瀬白波赤城山　〃

渡良瀬川の河川敷にて雉鳴けり　みち

幅広のかすむ赤城山あかぎと川の水　高志

柏餅桐生に和菓子屋軒並べ　みち

爽やかや電動自転車風切って　〃

編集後記

いくら待ってもたけにぐさの入稿の電子メールが来ませんので、ここまでゞ四月号の後記を書いて終わりにします。さて平成も残すところ1年。バブル崩壊や震災の一方、ＩＴの発達で世界中の人とやりとりできる時代になった。平成さんと言う人の半生が三面記事に掲載されている。私と一つ上の77歳、平の姓に成田山の成をもらって平成たいらしげるとお父さんが付けたとか。左欄に平成の主な出来事を羅列してある記事。色々大変な事が起こった世であった。この人64歳まで働いた。今は陶芸にはまって公民館で教えている。ポケットベルが苦手であった所為もあってケータイは持たない。ＩＴやＡＩが隆盛だけど、パソコンに興味がない。電車で見るスマホとにらめっこの老若男女に、変化が速い時代でみな大変だろうな、と思う云々。似たようなことを九～十頁に書いたのでここでは又書きませんが、現代技術の恩恵を受けているのだから毛嫌いせずにうまく利用して過ごせばいいのです。パソコンアレルギーは人によります。実名を書いたら良くないかも知れませんが、以前、ひろし先生から寄稿依頼が来て「ＵＳＢで送ってよ！」と聞いた時のちょっと驚いたのを覚えています。福山の同い年の作家さんは上の平さんと一緒、ケータイ嫌いパソコン嫌い、手書きで賀状をくれる。但し木版画の賀状。画伯だと言われている同級生の三原君だって一緒、メールはしないから、と素っ気ない。隣町に在住の広谷さんは建築の同級生だが、日本で最初にＣＡＤを開発した男で今は私のブログを見て、もっと見やすくしろと言ってくれる。人によりけりである。どうか我が白金葭も心を広く平らにして融通無碍にやって行きましょう。それが軽みの境地だと思っとりますんで。

白金葭4月号（通巻第八六号）平成三十年4月三十日発行
編集・発行人　光成高志　発行所　二七〇-一一一九　我孫子市南新木二-二四-一七
☎・fax　〇四-七一八七-一〇六八
表紙の題字：加納綾女　同写真は平成二十三年四月二九日の白金葭